

海からきた使い

小川未明

青空文庫

人間が、天国のようすを知りたいとおも
 供らはどうかして、下界の人間は、どんなような生活をして
 いるか知りたいたいとおもうのであります。

人間は、天国へいつてみることはできませんが、天使は、
 人間の世界へ、降りてくることはできるのであります。

「お母さま、どうぞ、わたしを一度下界へやってくださいまし。」
 天使の子供は、母親に頼んだのであります。けれど、お母さ
 まは、容易にそれを、お許しになりませんでした。

なぜなら、人間は、天使より野蛮であつたからです。そして、
 我が子の身の上に、どんなあやまちがないともかぎらないからで

ありました。

「どうぞ、お母さま、わたしを一度下界へやっってくださいまし。」
と、幾度となく、その小さな天使の一人は、お母さまに頼みました。

毎夜のように、地球は、美しく、紫色に空間に輝いて
いました。そして、その地球には天使と同じような姿をした人
間が住んで、いろいろな、それは、天使たちには、ちよつと想
像のつかない生活をしていると、聞いたからでありました。

「それほどまでに、下界へいつてみたいなら、やつてあげないこ
ともないが、しかし、一度いったなら、三年は、辛抱してこの
天国へ帰ってきてはなりません。もし、その決心がついたな

ら、やってあげましょう……。」「と、お母さまはいわれました。
 うつく美しい天使は、しばらく考えていました。そして、ついに決
 心をいたしました。

「三年の間、わたしは下界にいつて、辛抱をいたします。そし
 て、いろいろのものを見たり、また、聞いたりしてきます。」「と
 答えました。

天国から、下界に達する道はいくつかありました。赤い船に
 乗つて、雲の間や、波の間を分けてから、怖ろしい旋風に、体
 をまかせて二日二晩も長い旅をつづけてから、ようやく、下界
 の海の上に静かに、降りることも、その一つであれば、また、体
 を雲と化したり、鳥と化したり、露と化したりして、下界の山の

上や、とがった建物の屋根のいただきや、野原などに降りることもできたのであります。

天使は、人間の力ではできないことも容易にされたのです。だから、小さなかわいらしい天使が、野蛮な人間の住んでいる下界へ降りてみたいなどと思つたのも無理のないことであります。

小さな天使は、いつしか下界に降りて、美しい少女となつていました。

ある秋の寒い日のこと、街はずれの大きな家の門辺に立つて、家の内からもれるピアノの音と、いい唄声にききとれていました。あまりに、その音が悲しかったからです。故郷といえは、

幾百千里遠いかわからないからです。そして、帰りたいと思つても、いまや、そのすべすらなく、まったく途もなかつたからであります。少女は、どうかして、やさしい人の情けによつて救われたと思います。

空は、時雨のきそうな模様でした。今朝がたから、街の中をさまよつていたのです。たまたまこの家の前にきて、思わず足を止めてしばらく聞きとれたのでした。

そのうちに、街には、燈火がつかしました。家のうちのピアノの音はやんで、唄の声もしくなりました。けれど、哀れな少女は、この家の前を去ろうとせず、そこに立っていました。

そのとき、りっぱな洋装をしてお嬢さんが出てきました。お

嬢じょうさんはこれから、どこかへ出でかけられるようすでした。

「お姉ねえさん、わたしもいつしよにつれていってください。」と、門かどに立たっている少しょう女じよは、呼よびかけました。

お嬢じょうさんは、びっくりして振ふりかえると、そこにかわいらしい、しかし寒さむそうな、さびしそうなようすをして、少しょう女じよが自分じぶんの顔かおを見み上げていましたので、この子供こどもは、どこの子こだろうかと、くびをかしげたが、思おもい出だせませんでした。

「どうして、私わたしがゆくところを知しっているの？」と、お嬢じょうさんはいいました。

「わたしは、お姉ねえさんが、おいでなされるところをよく知しっています。お姉ねえさんは、これから舞踏会ぶとうかいにおいてなさるのでしよう。」

わたしは、おじやまをいたしませんからどうかつれていってくだ
さい。わたしは、みなさんの踊りなさるのが見たいのです……。」
と、少女は頼みました。

「いいえ、おまえさんをつれてゆくことなどはできません。はや
く、お帰りなさい。」と、お嬢さんは、迷惑そうにいつて、さ
つさとあちらへいつてしまいました。

少女は、お嬢さんの行方をうらめしそうに見送っています
と、お嬢さんの姿は、夕もやのうちに隠れて、消えていつてしま
いました。少女は、しかたなく、さびしい方へと歩いてゆき
ました。

もう日は暮れかかっています。街を離れると、家の数がだん

だん少すくなくなりました。そのとき、途みちの上うえで、ちようど自分じぶんと同おなじ年としごろの少しょうじよ女よが、赤あかん坊ぼうを負おぶつて、子守唄こもりうたをうたつていました。この子守唄こもりうたを聞きくと、歩あるいてきた少しょうじよ女よは、すつかり感かんしん心しんしてしまいました。

「なんという、情なさけの深ふかい唄うただろう。天てん国ごくにも、これより貴とうとい唄うたを聞きいたことはない。」と、思おもいました。そして、少しょうじよ女よは、近ちかづくちかくと、赤あかん坊ぼうを負おぶつて、唄うたをうたつている娘むすめにやさしく問といかけたのであります。

「もう日ひが暮くれるじやありませんか。こんなにおそくなるまで、あなたは外そとに立たつて、唄うたをうたつておいでなさるのですか。」と、少しょうじよ女よはいいました。

あか ぼう おぶ
赤ん坊を負っている娘は、知らない少 女ではありましたが、
こうやさしく問といかけられると、目めに涙なみだをためて、

「お母かあさんが病びようき気なもんですから、乳ちちをたくさん飲のませることができないのです。なるだけ、赤あかちゃんを眠ねむらせるために、こうして、いつまでも外そとに立たって、唄うたをうたっているのです。」とい
いました。

少 女しょうじよは、娘むすめのいうことに、深ふかく同どう情じよういたしました。

「そんなら、夜中よなかでも起おきて、あなたは唄うたをうたいなさるのです
か？」

「夜中よなかでも起おきて、私わたしは、牛ぎゆう乳にゆうを飲のませたり、泣なくときは守も
りをしなればなりません。」と、娘むすめは、答こたえました。

うつく
美しい、やさしい少女は、感心してしまいました。

「わたしが、今夜、あなたに代わって赤ちゃんの守りをしてあげ
ましようか……。」と、少女はいいました。

「ありがとうございます。母が、かえつて気をもみますから、ど
うぞお気にかけないでください……。」と、娘は答えました。

少女は、しんせつが、かえつて迷惑になつてはいけない
と思つて立ち去りました。

「はやく、あなたのお母さんのおなおりなさるように祈つていま
す。」と、少女は、立ち去るときにいいました。

少女が歩いてきますと、あとから赤ん坊を負つた娘が追
かけてきました。そして、少女を呼び止めました。

「あなたのお家はどこですか……。」

少女は、さびしそうに、娘の顔を見て、微笑みながら、

「わたしの家は、遠いんですの……。。」と答えました。
娘は、聞いてびっくりしました。

「あなたは、こんなに暗くなって、どうしてお家へお帰りになる
ことができるのですか……。きたない家ですが、今夜、私の家に
泊まっていてください。」と、娘は、真心をこめていいま
した。

「わたしのことなら、どうぞおかまいなく……。。」と行って、少
女は、とつとつとあちらへ去ってしまいました。

その晩は、雨になりました。娘は、うす暗い家のうちで、赤ん

坊ぼうの守もりをしながら、先さつき刻き、前まえを通とおつたやさしい少しょう女じよは、いまごろどうしたろうと思おもつて、その身みの上うえを案あんじていたのです。しかし、この夜よから、お母かあさんの病びよう気きは、だんだんいいほうに向むかいました。

いつのまにか、冬ふゆがきてしまいました。

木こ枯がらしの吹ふく夜よるのことです。地ちの上うえには、二、三日にちまえ前に降ふつた大おお雪ゆきがまだ消きえずに残のこっていました。空そらには、きらきらと星ほしが、すごい雲くも間まに輝かがやいていました。

ここに憐あわれな年としとつた按あん摩まがありました。毎まい晩ばんのように、つえをついて、笛ふえを鳴ならしながら、町まちの中なかを歩あるいたのです。按あん摩まは、坂さかにかかつて、地ちが凍こおっているものですから、足あしをすべらし

ました。そのはずみに、懐中の財布を落とすと、口が開いて、
銀貨や、銅貨がみんなあたりどころがってしまつたのでした。

「あ、しまつた！」と、按摩はあわてて両手で地面を探しはじめました。

指のさきは、寒さと、冷たさのために痛んで、石ころであるか、
土であるか、それとも、銅貨であるかさえ判断がつかかなかつた
のでした。通る人たちは、わき見もせず、みんな寒いので家の
方へ急いでいきました。また、通りがかりに、この有り様を見た人
の中には、拾つてやつて、相手が盲目だから、かえつて疑われる
ようなことがあつてはつまらないと思つたり、また、中には、自
分で後からきて銭を拾つてやろうと、よくない考えを抱いたよう

な小僧こぞうなどもありました。

ちようどこのとき、やさしい少女しょうじよは通りかかったのです。

「なんとという、人間にんげんは、浅ましあさしい心こころをもっているのですしようか。

天国てんごくには、こんな考かんがえをもっているようなものや、薄情はくじような

ものは一人ひとりもないのに！」と思おもいました。

「おじいさん、わたしが、拾ひろつてあげます。」と、少女しょうじよはい

つて、銀貨ぎんかや、銅貨どうかを拾ひろつて、按摩あんまの財布さいふの中なかに入れてやりまし

た。

年としとつた按摩あんまは、たいへんに喜よろこびました。

「今夜こんやは、道みちが凍こおつてすべりますから、出でまいかと考かんがえましたの

を、出でたのでこんなぬにあいました。まことにありがとうござい

ます。「と行って、幾たびとなく礼を述べました。

やさしい少女は、按摩の手をひいて、家へつれて行ってやりました。

家では、おばあさんが、こんなに寒く、道がすべるからけがでもなければいいがと心配していました。そこへ、按摩のおじいさんは、少女に手をひかれて帰つてきました。

おばあさんは、おじいさんから、今夜少女に助けられた話をきくと、たいそう感心して厚くお礼を申しました。二人は、少女に、どうか上がってくれと行って、家へいれて、火をたいて暖かにして少女をいたわりました。

「お嬢さんは、この町の人ではないようですが、お家はどこでい

らつしやいますか。」と、おばあさんはたずねました。

少しょうじよ女じよは、急きゆうに、さびしそうな顔かおつきをしました。

「この世界せかいには、わたしの家いえというものはないのでございます。

わたしは、まったくの独ひとりぼっちで、今日きようはこの町まち、明日あすはあちらの村むらというふうあるに歩いてあるいます……。」と、少しょうじよ女じよは答こたえま

した。

すると、おばあさんも、おじいさんもあきれた顔かおつきをしました。

「まあ、そんなら、お母かあさんも、お父とうさんもおありなさらぬのですか？」と、二人ふたりはたずねました。

「わたしのお母かあさんも、お父とうさんも、ここから遠とおい、遠とおい、歩あるい

てはゆかれないところにいらつしやいます。」と、少女は答えしました。

おばあさんは、うなずきました。

「二人とも、おなくなりなさったので……あなたは、孤児なんです。ね。」といって、独りでそうきめてしまいました。

盲目のおじいさんは、おばあさんのそでをひきました。

「やさしい子でもあるし、両親がないというのだから、幸い、家の子にしてはどうだな？」と、顔をおばあさんの方に向けて、小さな声でいいました。

おばあさんは、じろじろと少女のようすを見て、孤児にしては、あまりきれいで、どこことなく上品なので、なんらか

ふに落ちないように小さくびを傾けていました。

「そう、おまえさんのように、やすやすときめていいものですか……。」と、怒り声を出していました。

「おばあさん、よく考えてみるがいい。こんな子供があつたら、どれほど、家の役にたつかしれないぜ。」と、按摩はいいました。

おばあさんは、なるほどとうなずきました。そこで、急に、声をやさしくして、少女に向かつて、

「どこのお嬢さんですか、知りませんが、いまのお話のような身の上でしたら、私の家の子になつてくださいますか。じつは、私たちは、二人ぎりです。おばあさんは頼みました。」と、

少女は、遠い、空のかなたのふるさとを思い出しました。

いつも、ふるさとのことを思うと悲しくなりました。

「わたしは、この家の子になつてしまふことができませんけれど、すこしの間でよければ、おてつだいをしてあげます。」と、

少女は答えました。

「そんなら、すこしの間でもいいから、てつだいをしてください。」と、二人は頼みました。

やさしい少女は、この日から、おばあさんやおじいさんのてつだいをしてしんせつに、二人のためにつくしたのです。

老人夫婦は、けつして、心の悪い人ではありませんでしたから、少女は、つらいことがあつても我慢をいたしました。そ

して、夜は、按摩のおじいさんの手を引いて町へもゆきました。

「おじいさん、寒い晩ですこと。」と、少女は、歩きながら、

おじいさんに向かつて話しました。

「ああ、早く、春になって、暖かになってくれるといい。」と、

おじいさんはいいました。

木枯らしが吹いていました。そして、星の光が、ぴかぴかと、

いまにも飛びそうに空に光っていました。少女は、じつと、

星の光をながめて、ふるさとを思い出していたのであります。

春になりました。海の上は穏やかに、山には、木々の花が咲い

て、野原には、緑色の草が芽ぐみました。ある日のこと、町

の人々は、海の上に、不思議な景色が見えるとうわさしました。

それは、しんきろう蜃気楼なのであります。

「おばあさん、うみ海の上に、ふしぎ不思議な景色がみ見えるといいいますから、
 いったてみましょう……。」と、しょうじよ少女は、おばあさんにいいま
 した。

「ああ、いいおてんき天気だから、おまえだけいってみておいでなさい。
わたしとしよ私は年寄りだから、ある歩くのがたいそうです。」と、おばあさんは
こた答えました。

しょうじよ少女は、ひと独りで、うみ海へいってみたのであります。かぎりも
 なく、うなばら海原は、あおあお青々としてかすんでいました。太陽の光は、
 うららかに、なみ波の上を照らしていました。町の人々まちは、ひとびとたくさ
 ん海辺へ出でうみべ沖の方をながめていました。そのうちに、もうろう

として夢ゆめのように、影かげのように、どこどこの景色けしきとも知らしない、山やまや、野原のほらや、紫むらさき色いろの屋根やねなどが浮うかんで見みえたのであります。

「ああ、わたしのふるさとふるさとの景色けしきだこと。」といつて、少女しょうじよは飛とび上あがりました。天てん国こくから、下界げかいへきてはや三年ねんの月日つきひがたつたのであります。その間あいだにいろいろの人間にんげんの生活せいかつに触ふれてみました。しかし、いまやふるさとふるさとに帰かえるときがきたのであります。

町まちの人々ひとびとは、不思議ふしぎな景色けしきが見みえなくなると、家いえの方ほうに帰かえりましたが、少女しょうじよだけは、岩いわの上うへに立たつて、沖おきの方ほうをいっしんに望のぞんでいました。そのうちうちに、一あか艘ふねの赤あかい船ふねが、こちらこちらをさしてこいできたのです。少女しょうじよを迎むかえにきたのでした。少女しょうじよ

女よは、それに乗のると、ふたたび天てん国こくをさして去きりました。こ
のやさしい天てん使しは、永えい久きゆうに、この下げ界かいに別わかれを告つげたのでし
た。

天てん国こくには、やさしい天てん使しのお母かあさんが、我わが子この帰かえるのを待ま
つていられました。三年ねんの間あいだ、下げ界かいに苦くるしんできた子こ供どもに、なん
の変かわりもなければいいがと心しん配ぱいしていられました。小ちいさな天て
使しは無ぶ事じに、ふたたびなつかしいお母かあさんを見るみことができまし
た。お母かあさんは、やはり、心こころの美うつくしい、汚けがれない我わが子こであると
お知しりなされると、ほんとうにお喜よろこびになりました。
姉あねの天てん使しも、弟おとうとの天てん使しも、みんなが下げ界かいの有あり様さまを知しらうと、
このやさしい天てん使しを取りとり囲かこんでお話はなしを伺うかがいました。小ちいさなやさし

い^{てんし}天使は、下^{げかい}界で^み見たことと知^しつたことを語^{かた}りました。そして、
正^{しょうじき}直^{ちか}な、哀^{あわ}れな人^{ひと}たちに、幸^{こうふく}福を^{あた}えてやりたいと答^{こた}えた
のであります。

——一九二四・一〇作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「少女倶楽部」

1925（大正14）年1月

※表題は底本では、「海《うみ》からきた使《つか》い」となっています。

※初出時の表題は「海から来た使ひ」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年2月12日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海からきた使い

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>